

## スタンダール論 <Ⅱ>

— 塔 と 変 容 —

佐 々 木 涇

### Ⅱ — 1

「知」の世界，とりわけ小説を書くために要求される世界，そこにはあらゆるものが導入されねばならない。もちろん主題の発展に必要なものに限られるものだが。スタンダールが1838年11月4日から七週間程で完成させた『パルムの僧院』は，彼の持ち得る全てを投入しているに違いない。広告文句のごときものでこの小説を評するなら，「戦争あり，冒険あり，迫害，陰謀，政争，殺人があり，宮廷に繰りひろげられる，破乱に富んだ恋の成就」とでも言えよう。

この長編小説には，スタンダールの体験し，認識したものがストーリー展開のために用いられ，ファブリスの生涯を中心にさまざまなきごとが繰り上げられている。スタンダールは，ファブリスのようにワーテルローの戦いに参加しなかったが，ナポレオンの第二次イタリア遠征軍（1800年5月）に参加している。十七歳にして戦闘を目撃する。(1)また1812年7月にスタンダールは，ナポレオン宛ての皇后マリアの親書を携えてロシアに向かい，ナポレオン軍と共にモスクワに入城する。しかし10月の退却を開始した軍より先にモスクワを出発し，苦しい敗退の旅をも体験している。さらにナポレオンの退位，王政復古，七月王政などの政情不安の時期を経ている。つまりスタンダールは同時代に生きた目撃者である。そして1822年に『恋愛論』を発表するに至るまでの，さらにその後のさまざまな恋の遍歴は，その多感さを有していた証左を示す。

スタンダールの《屋根裏部屋で小説を書く》(2)

という作業は単に書くというだけにとどまらない。炎上したモスクワにあっても，自己の原稿に推敲を加えた程である。この偉大な作家にとって常に「書く *écriture*」の作業は，彼独自の世界を保有していることに他ならない。ファブリスがブラネス師の鐘楼にあって，グリアンタの村とコモ湖の風景を見渡すかのように，スタンダールは「書く」作業を通じて政治，社会を見ていたに違いない。これらの体験なくして，饒舌のうちに完成された『パルムの僧院』は，われわれの世に伝えられなかっただろう。

従って，『赤と黒』『パルムの僧院』，未完の長編小説『リュシアン・ルーヴェン Lucien Leuwen』(3)と『ラミエル』、短編『アルマンス Armande (1826)』『カストロの尼 L'Abbesse de Castro (1839)』他十点以上の短編，さらに『イタリア絵画史 Histoire de la Peinture en Italie (1817)』『ナポレオンに関する覚書 Mémoires sur Napoléon (1836~1837年に執筆，未完)』自伝『エゴチスムの回想 Souvenirs D'Egotisme (1832年に執筆，未完)』『アンリ・ブリュラーの生涯』などの作品の陰には常に「書く」作業が営まれていたことは否定できない。これらのうち長編小説は，未完も含めて，いずれも時代背景はナポレオン敗退後の王政復古期，七月王政期になっている。しかし『パルムの僧院』のみが，北イタリアに舞台が設定されているだけで，他の作品はフランス国内でストーリーが展開されている。架空の公国を設定することによって，スタンダールの世界がより明確に，より自由に，つまりストーリー展開に際して，フランス国内に於ける不用な事象を捨てることでさらに本質をなす部分

が描きだされたと言えよう。この長編小説『パルムの僧院』の素材が、中世イタリアに求められたとは言え、屋根裏部屋のごとき「知」の世界からもたらされた想像の産物としてよい。

#### <註>

- 1)スタンダールの自伝『アンリ・ブリュラルの生涯』の第四十五章サン・ベルナル峠に記されている。<Vie de Henry Brulard>, Garnier, 1961, p. 396.
- 2) 長野大学紀要第8号の拙論86頁を参照。
- 3) この未完の作品は、1834年に書き始め、1835年『アンリ・ブリュラルの生涯』を書き始めた時に中止している。場所はパリで、銀行家の息子リュシアン・ルーヴェンの物語である。ジュリアンと同様、共和主義的精神の持主でナンシーで槍騎兵少尉として駐留している時に社交界に入る。またパリに戻っては内部大臣の秘書となって政界で仕事をするといった内容である。

## II-2

この『パルムの僧院』を完成させた精力的な叙述作業がスタンダールの世界の完成に至らしめた。つまり変容の末に到達した塔にあって描き出された世界である。『赤と黒』が<1830年代記>と副題がつけられているように、フランス革命後の政治状況や社会状況、そして共和主義者や王党派などの動きがさまざまなかたちで、ストーリーの展開に作用している。上昇志向の野心を有した知性あるジュリアン・ソレルは、ファブリスのごとき、君主を自由に操ることさえする庇護者が存在しなかった故に敗退した。王政復古期の貴族たちの政治に腐心する姿を描き出し、その渦中において、殺人未遂に至ってジュリアンの野心は弊える。法廷でジュリアンが陳述することばにスタンダールの主張する主題が明確になる。

「私の犯罪は残忍で、計画的でした。陪審員の皆さん、だから私は死刑に値します。しかしながら、私がより罪が軽くなろうとも、私の青春時代が同情に値し得ることを心にも留めずに、私を罰しようとし、低い階層に生まれ、貧困に虐げられた運命にあって、良い教育を受ける幸運と金持ち階級の高慢さが社交界と呼ぶ世界にも

ぐり込もうとする大担さを持つ低階層出身の若者たちの出鼻を絶えずくじこうとする人々がいることを私は知っています。

皆さん、以上が私の犯罪です。実際のところ私と同じ階層の人達に裁かれるわけがなければ、それだけその罪は厳しく罰せられるでしょう。陪審員席には成金的な百姓は見あたらず、憤慨した紳士たちだけです…。》(1)

『赤と黒』は共和主義者としてのスタンダールの告発の書である。

『パルムの僧院』においても、ジュリアンと同様にナポレオンを慕うファブリスを始めとした自由主義者が登場する。そしてパルム公国のエルネスト四世(実際、彼の謁見の間にはルイ十四世 Louis XIV (1638—1715)の等身像がある)(2)やファブリスの父などの王党派が描き出されている。フランス革命やナポレオンの影響により、これらの人物が配置されるが、この北イタリアの架空の王国では共和政治が施行されるまでに至らない。むしろモスカ伯爵やサン・セヴェリナ侯爵夫人らによる権謀術数によって、この国の政治が左右される。スタンダールがこのように描き出したのも、政治を取り扱うのが人間であり、その為政者のエゴイズムのごときものに左右されていると見做したがためであろう。

ファブリスは、ワーテルローの戦いに参加するとは言え、ジュリアンのごとき階級意識を持ち合わせてはいない。ファブリスの庇護者たちが君主を自由に操らんとする様子をスタンダールが描き出したのは、王政復古期におけるフランスの政治家たちを皮肉っていると言える。この小説も『赤と黒』と同様に告発の書とも言えるが、スタンダールの政治に対する認識の所産である。しかしながら、こうした部分は拡大されず、全てファブリスの幸福な状態を導き出すための小道具として扱っている。

バルザック Balzac (1799—1850)はこの時代のさまざまな人間を描写し、言わば時代の証言のごとくにリアリズムを駆使して現実社会を照らしだして、『人間喜劇 Comédie Humaine』と総称した一群の小説を著わした。それに対してスタンダールは、つぶさに見たはずの政治・社会状況がこうした一握りの人間達の本質によるものであ

ることを描き出したのである。この点から考えてみれば、スタンダールは政治などに翻弄されない世界を所有していたと言えよう。

<註>

- 1) Stendhal: Le Rouge et le Noir dans <Stendhal: Romans et Nouvelles I, Bibliothèque de la Pléiade, 1952>, p. 674.
- 2) Stendhal: La chartreuse de Parme dans <Stendhal: Romans et Nouvelles II, Bibliothèque de la Pléiade, 1952>, p.125

II — 3

『パルムの僧院』におけるファルネーゼ塔の位置がどんな部分を占めているか、簡単なストーリーの展開を記しておきたい。

16歳にして、ワーテルローの戦いに参加しようとしたファブリスは、イタリア語のなまりあるフランス語のために、逆にスパイとして捕えられ、33日間を牢獄で過ごす。

「それにこのことは望みもしないし、どんなにしたらって思いもよらぬことだ！ 牢獄に気をつける！ か……明らかに不吉な前ぶれだ。俺は牢獄でひどく苦しむようだ！(1)」

この前ぶれは十分に警戒する必要はあった。放蕩の末の殺人は、ローマにあるサンタンジエロ城塞を模したパルム公国のファルネーゼ塔に押し込むことになる。そこは、自由主義者が犯罪者として閉じ込められた牢獄でもある。囚われの身にあるファブリスに、スタンダールは牢獄の傍に住む城塞長官ファビオ・コンチ將軍 le general Fabio Conti の娘クレリア Clélia に引き合わせる。警戒すべき予言は、今や逆転した。

「その日は月が出ていた。ファブリスが牢獄に入った頃、月は水平線の右側、トレヴィズのあたりのアルプスの山脈の上に、荘厳に昇っていた。まだ八時半だった……自分の不幸をなんら考えずに、ファブリスはこの崇高な風景に感動させられ、魅せられた。「クレリア・コンチがいつもいるのはこんな素晴らしい世界だったんだ！ 考え深くまじめな心を持つあの人は、どんな人よりもこの眺めを楽しんでいるに違いない。パ

ルムから百里もある人気のない山の中に居るようだ。」窓ぎわで彼の心に話しかけてくるような水平線に見とれ、時には美しい長官の屋敷に視線を止めたりして二時間以上も過ぎてから、ファブリスは不意に声を上げた。「しかし、これが牢獄なのか？ あんなにも恐れたのがここなのか？」牢獄にあっては絶えず、不愉快なできごとや苦々しさの種々の理由を認める代りに、我らの主人公は牢獄の心地良さに魂せられるがままであった。》(2)

スタンダールと同様にファブリスにとって牢獄は好ましい場所となった。さまざまな手練手管を使用して、サンセヴェリナ侯爵夫人は、囚われの身からファブリスを解放しようとするが、それは逆に彼にとって悲劇の実現に他ならない。

「クレリアは翌日その憂いに沈んだのに気づき、軽はずみにも彼にその原因をたずねた。

「ぼくは侯爵夫人にはひどくおもしろくない返事をしそうなのです」

「あなたが断ってしまうなんて、どんなことをあの方はおっしゃったのですか？」とクレリアはときめきを覚える好気心にかかれて叫んだ。

「あの人はぼくをここから出したがっているのです」と答え、「ぼくが絶対に同意できないことなんです」と言った。》(3)

だが、ファブリスが毒殺される危険があるとする侯爵夫人の脱獄の説得は効を奏し、クレリアの協力で成功する。がそれは、ファブリスに意気消沈を与えるのみであった。

パルム公国のエルネスト四世の死後、革命的騒動の後、つまりエルネスト五世の施政の下で、サンセヴェリナ侯爵夫人のサロンの復活と共にモスカ伯爵はファブリスの殺人罪の再審を企てる。しかし、ファブリスは自己の意志で、再びファルネーゼ塔に戻る。

「クレリアは天が自分を罰するために認めたまぼろしだと思った。ついで恐ろしい現実だと知った。「あの人は捕ったのだわ！ もうだめなんだわ！」

.....

しばらくして、クレリアが目を再び開けた時、その最初の視線はファブリスに向けられていた。彼の眼に涙を認めたが、その涙はこの上

ない幸福の結果によるものだった。ファブリスは、自分の不在のために忘れられていなかったことを知った。二人のあわれな若者はお互いの視線に心を奪われていた。ファブリスは、ギターを伴奏にしているかのように、ようやく即興で歌った。「私が牢獄に戻ったのはあなたに会うためなのです。そして私は裁判を受けるのです」という意味のうたを。》<sup>(4)</sup>

スタンダールは、このファブリスとクレリアの恋の成就を結婚という形にはせずとも、人知れず達成させる。ファブリスがパルム公国の大司教の地位を得、クレリアはクレセンチ侯爵夫人 *La marquise Crescenzi* となった。しかし、二人の間の子、サンドリノ *Sandrino* の死、そしてクレリアの死後、ファブリスはパルムの僧院に退き、一年後に死ぬ。

ファブリスはファルネーゼ塔で恋を知り、他の地にあるよりも、ここにおいて幸福の情感を味わい、心の平安を知る。従ってこの小説において、高い所から見渡すことのできる高い場所が重要となってくる。ファブリスの囚われの身には生命の危険があり、ここにクレリアを登場させることによって、読者に緊迫した雰囲気と二人の心のありようを展開せしめる。作者スタンダールの精力的な敘述作業の中であって、最も凝縮された濃密な部分である。つまり人間の所有する感情をこの部分に投入することで、ファルネーゼ塔が単なる牢獄としての建築物ではないことになる。

#### <註>

1) *La Chartreuse de Parme*, Pléiade, p.55

2) *Ibid.*, p.310

3) *Ibid.*, p.342

4) *Ibid.*, p.434

## II — 4

この『パルムの僧院』の中で象徴的な建造物をスタンダールは次のように説明する。

「町の南東、十分ほどの所に、あのイタリア中に知れわたった有名な城塞がそびえている。そのずんぐりした塔は高さ百八十フィートもあり、遠くから目立っている。その塔は、十六世

紀の始め、パウロ三世法王の孫であるファルネーゼ家の人々によって、ローマのアドリアノ霊廟をまねて建造され、かなり周囲がある。そのため、屋上の展望台に城塞長官の屋敷とファルネーゼ塔と呼ばれる新しい牢舎を作ることができた。この牢舎は、義母と情を通じたラヌッチオ・エルネスト二世の長子のために造られ、この国では美しく特異なものとして思われている。》<sup>(1)</sup>

この塔は、すでに見てきたように本来の牢獄としての意味を持つだけではない。言わば内なる精神の自由を保証する場であり、ファブリスにとってはクレリアの出現により、その精神に快感と陶醉さえ与える場所でもある。従って、このファルネーゼ塔、そしてブラネス師の鐘楼のごとき地上より高い場所は、感情による至福をもたらす場であり、知的作業を営む場である。つまり「精神の高み」にあって、およそ人間のみが所有し得る精神的充足感の獲得の場である。

ファブリスは殺人を犯す前に、密かに訪れたブラネス師の鐘楼で次のように予言される。

「それで、ワーテルローを見ようとして、最初に牢獄に出くわしたというのは本当だな」

「はい、そうです」ファブリスは驚いて答えた。

「そうなら、それはまれな幸運というものだ。それと言うのもわしの言葉を通して注意しなされ。おまえの心は、ずっとつらくて、もっとひどい別な牢獄に対し備えることができるからな。明らかに、おまえはある罪によってそこから出られるだけだ。だが、幸いにもその罪をおまえが犯すわけではない。おまえが仕向けられたどんな暴力的な罪にも陥ってはならない。どうも、それと知らずにおまえの権利を侵害しようとする罪のない人間を殺すことのようにだ。もしおまえが、名誉というものにかなって正しいと思えるような暴力の誘惑に逆らうなら、おまえの生涯は人の眼から見て相当幸福なものになるだろう……賢明なる眼から見てもかなり幸福なはずだ」しばらく考えて、付け加えた。「おまえはなあ、わしのように死ぬだろうよ。木の椅子の上に腰をおろし、全ての奢りから遠く、そして奢りというものを悟ってな。それにわしと

同じに、なんらひどい咎めを受けずにな。》<sup>(2)</sup>

こうした予言を、この小説の初めの方に配置したのは、むしろスタンダールの作為であるが、鐘楼で話されたことに意味がある。言い代えるなら、ブラネス師の占星術に基づいた予言が知的作業の極致とすれば明白であろう。

「知」をブラネス師の鐘楼で知り、ファルネーゼ塔で「心」を知ることにより、至福のもたらす情感を味わった。「変容」は達成された。今やファブリスのごとき《パルムの僧院》で《木の椅子》の上であって、スタンダールは《全ての奢り》から遠ざかって良いのである。

スタンダールがこうした物語を一気に敘述したのは、彼自身がこの位置を獲得したからであり、そうでなければ『リュシアン・ルーヴェン』や

『ラミエル』のように未完に終わったであろう。『ラミエル』はこの小説の後に執筆されたが、「変容」の後であるがために未完となったと言えるのではあるまいか。つまり、完成された世界を再度描き出す必要がないために。スタンダールにとって、『屋根裏部屋』で小説を書くことは、想像による自由が保障されているのであり、ブラネス師の説くように《奢りというものを悟》ることを促すのである。そしてファブリスが鐘楼で、ひとりごちた《幸福》はこの精神の高みにあって、初めて獲得されるものである。

<註>

1) La chartreuse de Parme, Pleiade, p. 131

2) Ibid., p. 171